

北摂里山フォーラム

次世代につなぐ里山づくり
～多様な人材の参画をめざして～

開催記録

兵庫県阪神北県民局 北摂里山博物館運営協議会



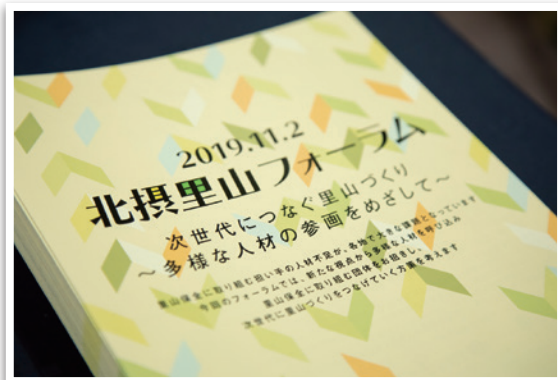
北摂里山フォーラムの様子



会場 宝塚ホテル



今回のステージ



当日配布資料



開会あいさつ



基調講演



「北摂里山博物館構想」の紹介



実践活動報告①



実践活動報告②

目 次

北摂里山フォーラム 開催結果概要 / 北摂里山フォーラム 次第	2
開会あいさつ	3
基調講演	4
「北摂里山博物館構想」の紹介(兵庫県阪神北県民局の取組)	9
実践活動報告	10
パネルディスカッション	17



北摂里山フォーラム 開催結果概要

テーマ：次世代につなぐ里山づくり～多様な人材の参画をめざして～

開催日：令和元年11月2日（土）

会場：宝塚ホテル すみれの間

主催：兵庫県阪神北県民局 / 北摂里山博物館運営協議会

参加者：135名

司会：本田 千恵子（兵庫県立ピッコロ劇団）



北摂里山フォーラム 次第

13:00～13:05	開会あいさつ	坂本哲也（兵庫県阪神北県民局長）
13:05～14:00	基調講演	作野広和（島根大学教育学部教授）
14:00～14:10	「北摂里山博物館構想」の紹介 （兵庫県阪神北県民局の取組）	
14:10～15:10	実践活動報告	能勢妙見山ブナ守の会（兵庫県川西市・大阪府能勢町） 神戸学生森林整備隊“こだま”（兵庫県神戸市） 林業女子会@京都（京都府京都市） NPO法人トチギ環境未来基地（栃木県益子町）
15:25～16:30	パネルディスカッション	コーディネーター ■作野広和（島根大学教育学部教授） パネリスト ■吉井麻里子（能勢妙見山ブナ守の会 広報担当） ■野口結子（神戸学生森林整備隊“こだま”代表） ■内海美沙（林業女子会@京都 森林プランナー） ■塚本竜也（NPO法人トチギ環境未来基地 代表理事）
16:30	閉会	

兵庫県阪神北県民局長 坂本 哲也



「北摂里山フォーラム」にお越しいただき感謝申し上げます。本県の北摂地域は、大阪北部の能勢から京都につながる大都市のエリアに位置し、ニュータウンの開発が進む中、今なお、「日本一の里山」とも称される里山の美しい景観や暮らしが残されている大変貴重な地域である。

しかし、里山を守るということは困難を伴う。里山は、人々の地域での暮らしと相まって初めて守られるものであるが、近年は厳しい状況になってきている。全国のニュースでも、熊や猪や鹿が街に出てきて被害が生じていることがよく報道される。これは、山と里・街の間にある里山が維持できなくなり、獣の餌がなくなっていることによるものと思われる。こうした地域の暮らしをどうやって守るのかということに着目し、阪神北県民局では、このエリア全体を一つの博物館に見立てて「北摂里山博物館構想」を推進している。「博物館」とは見るだけのものではない。そこにあるものを活かしつつ、地域の暮らしを守っていくための生産活動や生業、皆さんが山に入って様々な活動を行う保全活動や環境学習、また、最近全国でブームになっている里山の古民家でのくらし体験等を通じて、多くの方に里山に関わり里山のことを知っていただくことで、里山を守る取組を推進している。

全国的には、里山で活動されている方の年齢が上がってきており、継承してくれる人がいないという難しい問題がある。この北摂地域も同様であり、本日は、実際に活動されている若い人たちにお越しいただいた。島根大学の作野先生には基調講演に加え、そういった若者の活動や思いについて、活動報告や討論を通してコーディネートしていただき、本日のフォーラムで、今後どのようにして里山を繋ぎ守っていけば良いかということを考えていきたい。最後に、本日のフォーラムが実り多きものになることを期待する。



「多様な主体の参画による地域づくり ～里山への関わりを中心に～」

島根大学教育学部教授 作 野 広 和



島根県松江市から来たが、仕事の三分の一位は兵庫県の仕事をしている。大学では教育と研究が主な業務であるが、それ以外に、地域づくり活動、講演、政策の検討や人材育成など様々な分野に取り組んでいる。大学の授業では全てフィールドワークを実施しており、学生たちをラボ（研究室の分室）に連れて行き、実体験させている。ゼミの学生たちは地域にどっぷりつかって研究を進める一方、私自身も最小の単位では集落レベル、大きな単位では国の政策レベルにも関わっている。最近の仕事では、学校の魅力化や地域づくりに地域住民と一緒に取り組んでいる。例えば、豊岡市の29地区や佐用町の13地区等では、全ての地区で市や町と一緒に取り組んでおり、時間がすぐに過ぎていく。また、地域コミュニティ組織の再活性化を通じて得た情報は、農林水産省や参議院自民党等でもお話をさせていただいており、中央の人たちにも注目されている。直近では、過疎地域自立促進特別措置法による過疎指定地域が来年度末で失効するため、その対応について検討する過疎問題懇談会等に参加して意見を述べている。

様々な活動に取り組む際には、様々な壁に直面する。その原因は、地域のあり方や地域の人々の想いがあるからである。本日私からは、里山を取り巻く地域がどのように成り立ち、そこに生活する人々は何を考えながら暮らしているのかについてお話させていただく。今後の里山を取り巻く環境を見る時に、日本全体の動向あるいは世界の動向を見ていく必要がある。

日本は人口減少社会に突入し、そのことがようやく国民にも認識されてきた。この流れは当分の間は止められない。5年前、消滅可能性都市（20・30代の女性が2010年から2040年にかけて50%以上少なくなる市区町村）が話題になったが、若い女性が減っていくということは、生まれる子どもが減っていくということ。ふりかえると、50年ほど前から警告はされていた。1962年にレイチェル・カーソンが著した『沈黙の春』、ローマクラブが「成長の限界」を発表したのは1972年、そして、日本で合計特殊出生率が2を割ったのが1975年、本当はこの頃に気づくべきであった。1971年に環境庁ができ、1973年にオイルショックがあった。その頃に21世紀の暮らしのあり方をどう考えるか、もっと真剣に向き合うべきであった。最近はそのいったことに言及する有識者も増えているが、昭和型の資本主義万能社会の終焉を指摘しているものの、終焉後の社会は描き切れていないのが現実である。そのような中で、藻谷浩介氏は2013年に『里山資本主義』を発表され、兵庫県で活躍されている山崎亮氏は「縮充社会」を提唱されているが、それぞれが表現しているのはトータルでは縮小していくということである。このことを私たちがどのように見つめ、地域にどのように落とし込むのかが問われているが、地域の実態と今後の里山のあり方の間にはタイムラグがあり、そこをどのように見ていくのかについてお話させていただく。

私は里山の専門家ではないが、地理という学問で整理している里山を紹介する。私は集落の研究をしており、集落はムラ（村）とも言われ、その集落の構成は、人が住んでいるムラ（村）、いわゆる住居、神社、集会所等がある。その周辺にノラ（田・畑）が展開している。そしてその外側に、その集

落のものとしてのヤマ、これが里山に相当すると考えている。そして奥深い山をオクヤマ（奥山）と表現している。ヤマとオクヤマとの境界あたりにヤマノカミ（山ノ神）が置かれている。そこから先は、人が支配（マネジメント）する地域ではないため入ってはいけない。人が支配しないということは、神や魂や獣などが支配する地域だということである。鳥獣害が起こっているのは、ムラやノラやヤマが縮小し、オクヤマが結果として前進してくるためである。そもそも人の領域に獣が入ってくれば、当然被害も起こる。逆に、人が人の制御の効かないエリアにむやみに入ると、様々な不幸なことが起こるのもこの構造のためである。ちなみに中国地方では、サイノカミ（塞ノ神）という表現がよく使われ、隣の村も同じような境界になっており、このような村と村とでできているのが、中山間地域であり里山地域であると表現できる。

そういった里山地域は、直接的には昭和 30 年代後半から 40 年代の過疎化で大きく綻んできた。そのような地域では、おじいさんおばあさん世代、お母さんお父さん世代、子ども世代、のような同族性・同質性があり、全ての家が同様の世帯なので、そのような人たちが田畑を耕し山に入り山を活用するという里山の環境があった。ところが現代では、過疎化で若い世代が出て行き、おじいさんおばあさんがお年を召されて介護が必要になり、中には自宅では介護ができず介護施設に入る、あるいは子ども世代が就労で出て行くなど、世帯が多様化している。I ターンや、耕作地では入作で人が入ってくる場合もあるが、現代社会のシステムでは周囲との関わりが十分でないため、田畑では耕作が間に合わず、結果として耕作放棄地となったり、燃料や山菜の採取の対象であった里山にも手が回らなかったりするのが実態である。しかし、里山には当然価値や資源があり、それを守り活かす必要があり、そういった活動をされているのが本日の発表者の皆さんだと思っている。

では、このような綻んだ地域を今後どう見ていくのか。実はこの 10 年程様々な活動に取り組む中で、地域を持続していくための方程式はできている。それをキャッチフレーズで言うと、「住んでよし・訪れてよし・帰ってよしの地域づくり」と私は表現している。今までは、地域であるがままに暮らしていけばよかったが、今は意図して地域を作り上げていかなければならない。その際に、「守り」と「攻め」の 2 つの観点を車の両輪にして一緒に進めていくことが大事である。しかし、地域住民の皆さんは、今の暮らしを維持させる、地域のあり方が変わっても従来のシステムで持続させるというのが夢である。それは否定されるものでもなく、地域住民の皆さんが夢を実現することで、皆さんの所属感を満たしていくこともなる。一方で、時代が変化する中、伝統的なスタイルを維持することが地域の持続に繋がるかという点必ずしもそうではない。その場合は「攻め」の、その地域ならではの地域資源の活用や元気のある地域づくりを行い、それにより期待感が醸成され、地域の皆さんが刺激を受けて「守り」を頑張る、という構造になっている。

ところが、地域には様々な複雑な問題がある。私の経験からお伝えすると、まず地域住民には、これまで通りの社会が続くと信じている人が多い。例えば、集落の消滅に関する広島でのシンポジウムで、65 歳くらいの参加者が「先生の考え方は甘いと思う。日本は加工貿易の国だと習った。加工貿易の国に戻していくにはどう考えるべきかが重要だ。」とおっしゃった。シンポジウムのテーマと全く合っていないだけでなく、そもそも今の日本の貿易依存度は 15.2% で、日本はもう加工貿易の国ではない。しかしこの方は、およそ 50 年前に習ったことを信じ、全てそのように変換して理解されている。

それから、これは結構重要なことであるが、地域というのは基本的に変化を望まない。このままでは駄目だと思っているとよく言われるが、変化・変革は望まない。だからといって問題ばかり見ても将来は見えないが、何とかしたいと思うがしんどい。なぜしんどいのかと言うと、地域というのはムラ単位で合意が得られなければ進まず、合意形成は困難を極める。なぜかと言えば、等質性の高い社会では、以前は大半の人が同じような農業・所得・家庭環境であったのが、今はバラバラである。バラバラでいながら、お互いが共存している。しかし、お互いの利害関係が異なり気を遣うため、結局

合意できない。できないから、できない理由を言うのである。

他にも、例えば私が数年前に初めて奈良県の吉野町からオファーを受けた時に、吉野町について調べた。日本全体の合計特殊出生率が1.44なのに対し、吉野町は1.1でかなり低い割合であった。奈良県全体でも低い、1.1というのは世代を一巡したら半分になるということ。吉野町から何とかしてほしいと講演を依頼され、かなり危機的状況であることを話したが、地元の方は「不便なところだから仕方がない」と言われる。不便といっても、島根と比べ、吉野は大阪まで電車で1時間で行ける場所なのに、そのような言い訳をされる。それから、そもそも役場の職員が町内に住んでいない。そのことを指摘すると、役場の職員はふるさと納税をしていると言われる。ふるさと納税の趣旨が違いうのに、それが評価されるのは良くない状況である。子育て世代が少しでも住まないと地域が維持できないが、何かをやろうとすると必ず「雇用先があれば定住するはずだ」と言われる。しかし、役場職員が定住していないのが現実である。しかも、講演を聞きに来るような意識のある人たちがそのような発言をしている。結局できない理由づくりをされ、降り出しに戻ってしまう。このような地域に何度講演しても、講演では地域は変わらないので、別の作戦を取らなければならない。



次のポイントであるが、地域は神や魂との交信権を有している。これは私が至った結論である。先程の里山とオクヤマとの違い、神や魂の領域がある。ムラ型コミュニティは、現代社会にはうまく対応しづらい仕組みになっている。ボンディング型（強固だけど閉鎖的な結束型）のソーシャルキャピタルは、そこに住んでいるから同属性・同質性を帯びており、そこで有無を言わず固まる。一方、里山で活動されるような主に大都市の周辺に住んでいる方は、市民型コミュニティと表現し

ているが、ブリッジング型（ゆるやかであるがオープンな橋渡し型）のソーシャルキャピタルに依拠している。つまり、目的に賛同して参画する、異なる集団の間の異質な人たちの結びつきである。

これはどちらが大事というのではなく、ムラはいつまでたってもムラであり、だからこそ里山のようなものが残される。一方で、地域が綻んでいく中で、ブリッジング型の人たちの助けが必要であり、地域が綻ばないようにするためには、ボンディング型とブリッジング型が車輪の両輪のようにしていかなければならない。ボンディング型の課題は、自らが生まれたその地域での自然や魂との交信権があり、それを守り続けることが絶対命題である。そのため、経済的な価値とは関係なく、様々なことを地域で決めて従事していくことになる。都会に多いブリッジング型の方々が、ボンディング型の村の人たちの思いを理解した方が上手くいくと思い、紹介させていただいた。

また、社会が進展すると、様々な組織が地域を支えることを求める。しかし、どの組織も自分のことばかり考えている。例えば、社会福祉協議会、公民館、青年会議所、それぞれが「私たちは地域づくりをしたい」と言うが、それぞれがしきたりや法律に基づき縦割りが入ってくるため横につながらない。一方で、地域には全てが存在しなければならない。そのため、縦軸で入ってくるものを横軸で繋いでいく必要がある。横軸は自治会や少し広いエリアなどを指す地域である。この横軸に対して、行政や知識を持った人たち、福祉を実現しようとする人たちがそれぞれ地域に入ってくる。例えば、里山に関わる皆さんが、環境や里山保全を掲げて縦軸で入る。この縦軸と横軸がすれ違いではいけない。双方をいかに結びつけるかが大事である。縦軸と横軸を結びつける人がいないと地域は良くなりませんし、地域の側は外からお手伝いに来る縦軸の人の思いを受け止められない。双方を結びつけるには、縦軸と横軸の両方の言語を持って語れる人でなければ難しい。このあと発表される4団体の皆さんや、

里山保全をされている組織の中には、おそらくそういう方々がいらっしゃる。今後は、地域の人々の願いや想いを感じ取りながら、縦軸と横軸を紡いでいくことが、里山を持続させる大きなポイントになると思う。

それから、トップダウンとボトムアップのリエゾン（連携）ポイントを見極めることである。地域はどちらかといえば階層構造的なトップダウン型。それに対し、里山づくりは大都市側の有志が集うボトムアップ型。地域内の折り合いを通じて地域の願いを持ったトップダウン型と、有志の願いで動くボトムアップ型との間ですれ違いが起こる。同様に、誰がリエゾンポイントを見極めるのかが大事になるが、日本ではそういったことを職業にできる状況になっていない。

また、ブリッジング型でゆるやかな合意形成で結びつくネットワーク型組織の人たちが、強い結合関係にあるボンディング型の自治会や集落等と結びつく大変である。ボンディング型は上意下達でありかつ満場一致でないと動けない組織なので、ネットワーク型のような生きがいによる参入が困難であり、双方の組織の折り合いは難しい。理想的には、地域住民の中で両方の感覚を養えるといいのではないかと思う。

そして、よく「土の人」・「風の人」と言われる。地域住民が「土の人」。「風の人」は外部から現れてその地域に新鮮な風を吹かせる。地域の中に種が飛んで来て、土に定着して新しい芽を育てる。こうした事が里山づくりに期待される。さらに、種が落ちて発芽し育っていくためには、お世話をしてくれる人が必要。そのような人を「水の人」と呼んでいるが、この第三者である「水の人」がいないと地域はうまく動かないため、積極的に養成していく必要がある。こうした地域の注意点を認識いただいたうえで、次に話題を進めたい。

ここまで話したポイントでは、「関係人口」という概念が、里山づくりに可能性を持たせると考えられる。ここ2年くらいで急速に広がってきたが、その大きなきっかけは、指出一正氏が書かれた『僕らは地方で幸せを見つける』という本である。最近の若者はローカルに対する興味があり、世の中の役に立ちたいと思っている。自分の存在価値を認められたいから、「関わりしろ」がある地域が前進していく。それをローカルイノベーションとおっしゃっている。関係人口にかかわらず、「関わりしろ」のあるところに若者たちが興味を持って参画していく。

例えば、愛知県一宮は毛織物工業が一大産業である。織物産業は斜陽産業だと考えられているが、伝統ある匠の仕事に若者は憧れを持っていることから、何もしなくても後継者が集まる会社もある。時代は変化しており、都会から田舎へ人が移住するケースは増えてきている。私が住む鳥根県では、5年間で29歳以上の人口が増えたエリアがあり、山間部でもなく都市部でもなく中間ぐらいの所で点々と増えている。このことは、先ほど述べた地域の注意点がある程度クリアできている地域では、変化が起きている証拠である。



そうした中で、東北の高橋博之氏や私の盟友の田中輝美氏が、関係人口に関する本を出すなどして一気に注目が集まった。関係人口というのは、言葉の通り地域に関わってくれる人口のことであり、自らその地域に頻繁に通わなくても、何らかの形でその地域を応援する人たちだと指出氏は言っている。また、交流人口以上定住人口未満という分かりやすい表現をされている。ちなみに私も、関係人口という言葉を生み出した政府の研究会の委員の一人である。

指出氏の本からいくつか事例を紹介すると、パーティーを続けながら使われなくなった建物を改修

し続ける 20 代男子 3 人組の建築集団「パーリー建築」が例に挙げられる。彼らが言うには楽しければいい、安定よりも夢を追う、そういったことで地域の人に喜ばれ、自分たちも楽しく地域の人々も楽しい、こういった考え方もある。また、東北の震災後、「ペンターン女子」という大学生が、最初はボランティアで震災復興に関わり足繁く東北に通い、卒業と同時に気仙沼に移住を決めた。足繁く通うことで本人たちの要求も満たし、地域の困りごとにも手助けできる、このような関係を関係人口と呼んでいる。

「関係人口」という概念には様々なタイプがあるが、大事なことは、大都市圏には消費・仕事・経済の重視によるある種の限界がある。一方で里山があるふるさと圏は、人・地域・生業・暮らしが中心であり、お金では買えない伝統的な文化が残っている。このような理想的なものは残っているのに、どんどん地域は衰退している。皆がなんとかしたいと思っている中、志はあるが移住はできない大都市圏の人たちが思いを寄せ、ふるさと圏への関わりを持つことが関係人口と称されている。しかし、関係人口だけで地域が維持されるわけではない。関係人口はローカルイノベーションを起こす声であり、「風の人」にも、場合によっては「水の人」にもなりうるが、「風の人」や「水の人」がいれば地域が維持できるということではなく、「土の人」は絶対に必要である。私は定住人口補完機能と呼んでいるが、地域を維持するために定住者は必要だと考えている。そのため、関係人口は大事であるが定住人口も維持する。関係人口の一部は定住人口にも変わる。そのような存在になると思う。

また、関係人口にはステップがあると言われてい

いる。まず窓口機能が必要で、関係人口を構築する上では人と地域をつなぐ必要がある。地域に思いを寄せる人が関わるきっかけが必要。それを指出氏は「関わりしろ」と呼んでいる。里山に参画してもらうためには「関わりしろ」を用意する必要がある。例えば研修会や交流会やプロジェクト支援など。レベルが上がってくると、マッチングや体験ツアーの拠点のように発展していく。私が刺激を受けた徳島県的小林氏は「関係案内所」



を開いている。ただ、関係案内所は重要であるが、あればいいわけではなく、重要なのはやはり人だと。小林氏が言うには、移住者に徳島県への移住の理由を尋ねると、多くの人が「知り合いがいる」を理由にする。その知り合いとは自分（小林氏）だと言う。人と地域をつなぐ時に、その地域側の窓口になる人がいかに重要かを示すエピソードになる。

ある程度繋がっていくと調整機能が必要になる。例えば体験的な農家民宿や貸し農園のように、里山側もそのような場を作らないと、なかなか人と人が繋がらない。あるがままの里山だと関わる人が少なくなる。他にも、佐用町の小学校跡で、自分の出身地で技術と能力を活かし、何でも解決できる実験室という意味の「ファブラボ（ファブリケーションラボラトリー）」を作って地域の課題を解決する方がいる。実際にニーズもあり、攻めの観点だということがわかる。そのような動きが定着しなければ、今を維持するだけで未来に繋がらない。また、私が住んでいる島根県の雲南市ではコミュニティナースの活動が非常に盛んである。地域の看護師が必要だということで募集すると、鹿児島大学附属病院を退職されてIターンで入ってこられた方がいた。このように窓口や突破口となる入り口があると、様々な形で地域に関わることができる。

他にも、隠岐の海士町などの事例もあるので、別の機会にお聞きいただければと思う。ご清聴頂き、ありがとうございました。

「北摂里山博物館構想」の紹介（兵庫県阪神北県民局の取組）

平成 23 年度に策定された「北摂里山博物館構想」の実現に向けた、これまでの兵庫県阪神北県民局の取組を紹介した動画を上映。



(<https://www.youtube.com/watch?v=q8ASD3AcFzY>)

【概要】

日本人にとって生活に密着した場だった里山は、燃料を供給する役割を終え、人の手が入ることがなくなったため荒廃。その荒れた里山を再生して新たな価値を見出すべく、北摂地域で新たな里山保全活動が動き始めた。そこで、北摂里山の持続的な保全を図り北摂地域の活性化につなげることを目的とし、兵庫県阪神北県民局の位置する北摂地域において、都会近くに残された北摂里山の一角を、「北摂里山博物館（地域まるごとミュージアム）」と命名。北摂地域の代表的な里山を「北摂里山 30」（今年度は 4 件を追加）として、またそれら里山を結ぶ街道を里山街道として位置づけ、北摂里山博物館構想の実現に向けてこれまでに様々な事業を実施。

北摂里山を学ぶことを通じて森林ボランティアや環境保全などの活動に取り組む人材を育成する市民大学「北摂里山大学」、小中学生を対象として里山への理解と愛着を深める「こども北摂里山探検隊」、里山の保全や利活用を行う団体に対して助成を行う「北摂里山魅力づくり応援事業」、北摂里山での様々なウォーキングイベントの開催、構想に賛同していただける会員組織「北摂里山サポーターズクラブ」の結成、北摂里山の情報を発信するホームページやガイドブックの作成などがある。

これらの取組を美しい北摂里山の映像とともに紹介した。



能勢妙見山ブナ守の会

広報担当 吉 井 麻里子



私は能勢妙見山で事務を担当しながら「ブナ守の会」の活動にも関わっている。小さい頃から自然が大好きで、虫やカエルを手づかみするのでよく驚かれる。また、アートや音楽、食べることも大好きだった。

今回来場の方は、森林に興味をお持ちの方が多と思うが、「ブナ守の会」の名前にある妙見山のブナ林と聞いて、ブナとは何か、なぜ守るのかとお思いの方がおられるかもしれない。私は「ブナ守の会」に出会った頃、木は勝手に生えてくるので放っておけばよいと思っていた。森を守るとは？何から守るのか？など、森への接し方が分からなかった。この問題は、今も学びながら考え続けている。

ボランティア団体で活動されている方は分かると思うが、森林保全ボランティアの実際の活動は、シンプルで地味な作業が多い。「ブナ守の会」の活動も、ブナの苗を保護して育てる、シカ避けの柵を作って草刈りをするなど。会員数は約70名だが、常に参加しているメンバーは約20名。最近は大学生や女性の飛び込み参加や、継続的に関わる方が増えているが、大半が60歳以上の男性で、技術や知識が素晴らしいので、いつも勉強させて頂いている。大半が肉体労働になるが、参加者のモチベーションに関心を持ちつつ一緒に活動している。

少し話題を変え、私たちの活動地である能勢妙見山は、水が豊かで大木が多い境内地。1200年以上前にはすでに山岳信仰があり、その頃にお寺が建立された。また、この森は1万年前から続いているが、1万年前といえば中国で農耕が始まった頃。最後にマンモスがいたのが約5000年前なので、マンモスがいた時代より前からブナ林は続いている。約1万年前に地球で最後の氷河期が終わり、気温が6～7度低かった。ブナは寒い所が好きな木であるが、その頃にブナは生き残りをかけ、暖かい所に種を広げ、寒くなったら倒れていき緩やかに大移動を決行した。その後少しずつ暖かくなり、今度はブナは寒い所に追いやられていった。逃げ場のない標高の高い山上に追いやられたブナが、今は妙見山の山頂に残っている。ブナは水が多い所を好むので、水が多い妙見山はうってつけの場所。ブナは種を遠くに飛ばせないの、種が遠くから飛んできてブナが育った可能性は低い。ブナは水が多く径材にもならず役に立たないので、スギやヒノキに植え替えられていくため、山頂に残ったブナ林は貴重な存在になった。今でもブナは、六甲山の山頂や和泉葛城山の山頂など、関西でも限られた場所にしか存在しない。能勢妙見山のブナ林は、山奥でない車で10分程度の所にあり、山岳信仰の場所のため、人の手が入らず守られてきた。今は地球温暖化やシカの食害で、残されたブナも危うい状態にある。我々がブナを守る意味がそこにある。

活動のモチベーションについてであるが、ブナ林は地球上で一番美しい癒しを受ける森だという方もいる。美しい森とされるブナ林を妙見山山頂で残そうと、試行錯誤を繰り返しながら「ブナ守の会」は活動している。ブナ林のことを話し、やはりブナ林を残したいという考えを共有できる事が一つのモチベーションになる。また、ブナ林内での活動は気持ちがいい。森林浴で森はフィトンチッドという成分を出し、人にも良い効果を与える。夏は涼しく周囲から音も入ってこず、鳥の声や珍しい虫、

そのような場所でリフレッシュしながら活動される方も多い。森の知識が豊富な方が多く、新しい知識をいただきながら活動できるのは素敵なことである。

今の私の中の結論として、森は私たちが考えているより奥が深く、まるで宇宙のようである。そのような森を「守る」というのは何か違うと感じており、森のこれからに関わらせていただく生物の一員という気持ちで活動に取り組んでいる。



ここからは、実際に開催しているイベントを紹介する。「ブナ守の会」のイベントは、森の美しさを多くの人に感じていただくために行っている。見た目の美しさだけでなく、ブナ林の歴史、意義、生物多様性等の重要性に優れている地理的な意味合いなど、全てを含んだ上での美しさを感じていただけるような解説や実際に触れていただく工夫をしている。

「北極星の森の撮影会」では、四季を通じて写真が好きな方、散策が好き

な方にお越しいただき、写真家の先生のご指導のもとブナ林を撮影する。また、自然観察会や森の空気を味わいながらの「北極星の森の朗読会」も開催している。ブナ林の中は声が響き、ブナ林ホールの中で森林浴をしながら声を出してリフレッシュする空間に触れていただく。山の日には、「能勢妙見山山の日フェスタ」というお祭りで、「森音」と題して30名限定のアンプラグドライブをブナ林の中で開催する。また、最近の人気は「GreenWoodWork」で、特に若い方に人気があり、木を削りながらスプーンを作ったり、台風で落ちたブナの倒木などを使って活動し、それを通じて保護活動に入られる方も多い。最近では若い方、大学生のボランティア団体の方が仲間を連れてきてくることもある。ご清聴頂き、ありがとうございました。

神戸学生森林整備隊 “こだま”

山 下 躍 宇
大 崎 梨央奈
井 上 雄 介



神戸学生森林整備隊“こだま”は大学生を主体とする団体で、野外活動から環境教育まで幅広く活動している。一人ひとりが主体的に動き、生き物の面白さを伝えることを活動理念としている。2014年に神戸大学森林資源学研究室を中心に発足し、毎月1回「キーナの森」で行われる“もりかつ”に参加し、園路沿いの樹木の整備、木材や草木の活用、動植物の調査や観察イベントの企画、森の見ど

ころづくりの発信を行っている。

活動拠点である「キーナの森」は、地域の薪や炭の供給源となる森だったが、戦後に森の資源利用が途絶え、管理放棄林になった。さらに神戸空港の造成のため土砂の採掘など開発が進む中、開発されずに残った森は、当時は「しあわせの森」とされ、開園に向けて整備された。そして2017年7月に、神戸市の自然公園「キーナの森」として開園した。

次に、活動のきっかけと方針についてであるが、放棄され荒れてしまった管理放棄林の現状、管理者の高齢化、科学的知見の不足、若者離れといった問題に対して、生き物好きな学生の視点から里山でできることを考え、里山で活動する学生サークルを結成した。活動の目標は、生き物や森林に関する科学的知識に基づく森の手入れ、「キーナの森」がもつ生物多様性の豊かさや生き物の魅力を市民に発信することである。

次に、これまでの活動についてであるが、「キーナの森」では、例えば冬は野鳥の巣箱作り、春は山菜採り、夏は生物観察イベント、秋は草木染めなど月ごとに様々な活動を行っている。主な活動地は、敷地内の交流棟・主園路等で、棚田の跡地は開けた活動広場となっている。他にツツジが見られる展望台や野鳥が見られる水場などがある。

次に、森でのイベントについては、6月にモリアオガエルの観察会を実施し、神戸市と共同で子供達に「キーナの森」の多様性を感じてもらうことを目的とした昆虫ライトトラップイベントも実施した。子供達は集まった虫を実際に見て触れることの大切さを実感した様子であった。

続いて、昆虫班の活動について、この班のテーマは、「キーナの森」に住む昆虫の魅力を見つけ、発信していくことである。主園路沿いで昆虫を探し、捕れた昆虫と場所を記録する。また、記録だけでなく、それをもとに昆虫イベントの企画や報告、保全の提案などにつなげていきたい。これまでの調査から、各所でおもしろい虫が集まっていることが判明した。5月から9月の長い期間に亘って、今年は11種類のトンボを確認した。今後は月ごとに、ヤゴの生育状況や場所の記録を続けていきたい。

続いて、ハチ小屋で見られたハチの仲間について、竹筒トラップを小屋に仕掛け、どのようなハチが竹筒を利用するかを調査した。8月にはミカドジガバチやフタオビドロバチの仲間を確認した。他にもハチの仲間を11種類確認し、ハチにとっての環境が整っていると考えている。今後もさらなる調査や、トンボ類などの詳細なデータを集めて整理し、「キーナの森」の生き物掲示板やイベントの企画などに活用していきたい。また、これまでの観察地以外にも観察範囲を広げていきたい。



次に、野鳥が見られる水場について、先ほど紹介したモリアオガエルの観察会と同じ場所で、主園路沿いに大きな水たまりがあり、モリアオガエルをはじめ、様々な両生類の産卵の場となっている。また、水たまりの水源の奥に別の水たまりもあり、多くの野鳥が水浴びや水飲み場として利用している。それらを観察できる場として、階段設置などの整備を行っている。また、活動の一つとして、カメラトラップを仕掛け、水場を利用する生き物をモニタリング

している。今まで鳥類を中心に様々な動物を撮影した。代表的なものにヒヨドリやヤマガラなどがおり、季節によって見られる野鳥が変わる。近年、世界でも個体数が千羽以下まで減っていると言われるミゾゴイも利用していると知り、感動した。また、ニホンイノシシやシカ、外来種のアライグマが来ているのが現状であり、この他にも、タヌキやキツネやウサギなど里山で知られた哺乳類等も撮影され

ている。この水場は水位の低下が非常に早く、早いと一週間で干上がるという課題もあり、卵を産んだカエルのオタマジャクシが上陸する前に全滅したり、アライグマが来て卵を食べることもある。水位・水温の基礎調査や卵を守る整備は今後の課題であり検討していく。今後の活動としては、カメラトラップのデータをもとに、野鳥の種類や訪れる期間のリストアップ、水場のオタマジャクシのモニタリング結果のリストアップなどに取り組んでいきたい。

林業女子会@京都

森林プランナー 内海 美沙



京都から参りました。先に VTR を見ていただき、活動を紹介します。

【VTR 概要】

フリーランスの森林プランナーである内海さんの願いは森林管理の次世代への継承。山積する山の課題を多くの人に知ってほしいと願っている。フリーランスとして、行政・森林組合・法律家が動きにくいところを回りながら、その人たちと森との間をつないでいる。また、地域の問題を解決すると同時に、多くの方に知ってもらうために様々なイベントを開催するなどして、林業にまつわる厄介事のイメージを笑顔に変えながら有効活用することを推進。現在、様々なアイディアで林業を発信する森林プランナーとして活動。その際には、山との新しい関わり方を模索しつつ、元々あった森との関わりにも敬意を表しつつ、バランスをとりながら人と森をつなぐことを楽しんでいるという内容。



(<https://www.youtube.com/watch?v=14qsHBHQnec>)

先ほどの作野先生のお話でいえば、「風の人」「水の人」に当たる役割をしている。しかし「土の人」をリスペクトしている。私自身は大阪出身で口がうまく、学生時代はイベントコンパニオンをするなど広報は得意で、「水の人」「風の人」の役割が得意である。ただ身体は弱く、一つのコミュニティで継続することは苦手であるため、「土の人」を非常にリスペクトしている。

また、実家が土木建築業で、自宅は自宅兼事務所だった。生まれた頃にバブルが崩壊し、ちょうど経済が落ち込み土木・建築の会社が減少する時期に育った。土木を愛し、工事現場があると、現場の方に尊敬の念を抱く。同様に、地域の中でも現場の役割を担う方を尊敬し大事にしている。今そういった方が評価されず、「土の人」がお金をもらえていない。経済的にも社会的地位的にも低いと森林管理はできないと思い、紹介 VTR のような様々な手段を行っている。



今回は「林業女子会」という形で参加しているが、それは主な所属団体であり、実際には森林技術者として山に入るなど、地域の方と一緒に様々な作業や活動をしている。多様な人材と多様なプロジェクトに多様な形で関わり、私自身が多様な人間なので、様々な手段を組み合わせることで問題を解決できるようになり、8年経ってようやく地域の人に様々な形でお返しができるようになってきた。

最近は災害が増加しており、山の受益者を増やし、それらを解決していく必要がある。しかし、山の皆さんにとっては楽でないという困り、また楽しむ場がないと続かない。そのため、自分の興味があることをしながら林業や農業に取り組んでもらうなど、今の時代のニーズに合わせた関わり方を通じて森の受益者を増やそうと活動中である。

想像してください、山の価値を。山で何がしたいか、何ができるか、何を次の世代にしてもらいたいのか。そしてたくさんある山の課題。一対一で考えずに立体的に考える。そして面倒なことはたくさんあるが、「林業はオモロくないとアカン」という合言葉で活動していく。人を呼ぶにも一流の人を呼ぶ。妥協をしない。私は安心安全の高クオリティで取り組んでいるが、関わる方からリーズナブルだと思われるよう活動している。そして、技術と遊びと夢と課題解決と、様々な要素を組み合わせることで活動している。



NPO法人トチギ環境未来基地

代表理事 塚本 竜也



関東では、里山のことは西に学べ、とよく聞くんが、やはり西の皆さんの方が進んでいる認識がある。私達も栃木で数多くの仲間に参加して頂きながら、里山の整備を進めている。栃木でも台風19号により川で洪水が起こり大きな被害が出たため、今回は来るのが難しかったが、事務局の支えもあり会場に到着することができた。本日は、私達が取り組む活動について、事例を中心にお話しさせていただく。

設立して10年になるが、荒れた里山を少しでも綺麗な状態にしたい。そのために様々なアプローチをする中で、次の時代を担う若者たちに汗を流しながら様々なことを感じてもらい、その行動が里山を豊かにする未来に繋がればと思い、地域の方に教わりながら活動している。参加者は大学生が多い。ノコギリを持ったことがない人も多く、やればできるという事実を積み上げつつ安全に配慮し、竹林を4ha、荒れた里山を10haほどの整備を行っている。

活動の特徴は、特定のフィールドを持たず、地域からの応援要請に仲間のチームを連れて出かけるというスタイルである。年間に2,000人から2,500人のボランティアが参加しており、NPO活動なので里山が綺麗になっていくプロセスも大事だと考えており、そこに多くの人の参画機会をいかに作るかに力を入れている。

一番力を入れている活動は、3ヶ月間合宿生活をしながら森づくりに取り組むというプログラムである。栃木県益子町に事務所兼ボランティアハウスを構え、全国各地やアジア各地から森づくりを学びたいという人たちが集まり、日中は森に行きながら共同生活をしている。職員が二人、年間予算1,200万円程度の手づくりの団体であるが、行政の委託を受けず自分たちでお金を生み出すというポリシーを貫きながら、これまで10年間若者たちと活動してきた。

この長期間プログラムを始めるきっかけとしては、大学では林業、森林を勉強し、林業の経済的地位の向上も大事であるが、森林や里山に貢献できる体験活動のその先をどのように作るのかを考えていた。たまたまアメリカに6ヶ月間森づくりに取り組むプログラムがあると知り、それに参加したが、素晴らしいと感じた点があった。そのプログラムには、アメリカの若者が年間約25,000人参加しており、ボランティア活動ではなくナショナルサービスやコミュニティサービスという位置づけで、プログラム中の生活は税金で支えられる。初めは素人でも1年間汗を流すと技術も上達し、約250万本の植樹、延べ14,000kmの遊歩道整備、約4,700ヶ所の自然公園の整備などの成果を上げていることを知る。自分自身も参加し、このプログラムのクオリティに感銘を受けた。また、このプログラムは、大学に行くための給付型の奨学金制度と連動している。国のために戦争ではなく環境維持のため汗を流すということが、自分の人生を自分の力で切り開く未来と繋がっていたこと、それを日本で作りたいと思ったことが出発点である。

私たちのプログラムは20回を重ねた。10代後半から20代の若者が4～5人で生活し、食事や弁当を自炊で作るプログラムを3ヶ月間実施している。特定のフィールドではなく、毎週異なる依頼へのお手伝いや、年間契約している幼稚園の森などの整備活動を行う。また、環境保全活動では、里山の整備と若者の育成の両立をバランスよく行い、森の作業だけでなく、NPO活動やボランティアコーディ

ネーションについての勉強時間も含めている。3ヶ月の間に、作業だけでなく、出来る限り様々なことを学べるプログラムを組んでいる。これまで84名が参加し、うち8名が栃木県に移住した。また、プログラム終了後に21名がNPOで働いている。元々移住推進やNPO活動に関心のある若者が集まっている。

今年度の活動フィールドは8箇所。例えば、市貝町という人口12,000人の小さな町では、少子化により4つの小学校が一つに統合され、廃校で子ども達が遊んでいた頃の綺麗な山は、地域の力で整備していた動機が失われて荒廃した。しかし、地域の人たちには再び子供たちが集まる森として整備する体力がない。そこで、若者と一緒に活動したいという相談を受けた。どんな森にするのか話し合いを重ね、若者たちに応援を呼びかけた。若者に森を整備しようと呼びかけてもなかなか動かないが、こうしたストーリーの中だと意欲のある人が来てくれる。その後、もう一度学校があった頃の森に戻ることができた。その後も地域の方と作業し、今では廃校を使って地域のママさんが学童保育を始め、再び子供たちが楽しく遊べる森になった。このように、地域に力が足りないなど、若者のアイデアも欲しいという所に行って活動している。

参加機会をいかに広げるか。大学生のグループやボランティアへの呼びかけだけでは来ることができない人もいる。例えば引きこもりの若者たち。彼らは通常の広報ルートでは来ないが、支援団体と一緒に活動を企画することで里山に来てくれるし、大切な力となっている。これも里山づくり側のNPOの工夫することで、一緒に手をつなげる範囲は広がると感じている。里山に来てもらうため、「英語で森づくり」というプランも実施した。英語を話したい高校生は、森を整備したい高校生よりも多い。私たちのプログラムに参加する外国人ボランティアと英語を話せるというきっかけで募集したところ、英語を話したい高校生が参加してくれた。入り口は何でもいい。アイデアを出すことが大事。例えば、何も喋らず深く考えながら作業する「哲学の森づくり」など。

他にも、障がいを持った方も森に来られている。これは自分自身が学んだことで、当時の自分の感覚では危ないという気持ちが先に立っていたが、耳が聞こえない団体の人と一緒に考え、例えば筆談



や写真で説明を伝えるなどしてみた。できないとこちらが先に決め、受け入れを遮断していたと思った。実際にやってみて、条件の整備により一緒に作業ができることがわかった。最近増加しているニーズは、企業が新入社員研修で地域貢献することである。

そして、里山に「現代的な価値」を付与すること。里山の価値を再定義することは大事。これまでも里山は大事であったが、実生活の中で使うことがなくなった中、いかに様々な人が「や

はり里山は大事だ」と思うようになるか。人が入ることで維持されるのが里山であり、いかに里山に人が入るような動線を作るか、その切り口をどう作るか、その鍵は他の分野との連携だと考える。里山に接点がなかった団体が、里山に接点を持ち、一緒に何かをできる工夫をどれだけ作っていくか。例えば、わが町の事務所から歩いて5分の福祉施設の森では、障がいを持った方でも楽しめる里山づくり、障がい者と地域の方が自然な形で交流できる森を作るという取り組みを実施している。今後も、健康長寿社会や子供の貧困に対して里山は何をできるのか、こういったことも、里山団体だけでなく他の活動をされている方と一緒に考え、こちらからは出ないアイデアや知らないニーズをつかみ、一緒にできる活動につなげていく。働くことに困難を抱えている若者の小さな仕事づくりについても、里山で取り組んでいる。

テーマ：「みんなで関わる里山づくり ～里山の魅力と可能性～」



コーディネーター：島根大学教育学部教授

作野 広和氏

パネリスト：能勢妙見山ブナ守の会 広報担当

吉井 麻里子氏

神戸学生森林整備隊“こだま”代表

野口 結子氏

林業女子会@京都 森林プランナー

内海 美沙氏

NPO 法人トチギ環境未来基地 代表理事

塚本 竜也氏

○作野 広和：

このパネルディスカッションのテーマは「みんなで関わる里山づくり～里山の魅力と可能性～」であり、先ほど発表いただいた4つの団体の皆様に登壇いただいている。はじめに、4人の皆様の自己紹介や活動に至った経緯・動機など、先ほどのプレゼンテーションでは語れなかった部分も含めて発表いただきたい。

○吉井 麻里子：

「能勢妙見山ブナ森の会」に入った経緯は、お寺の仕事をしている上で一緒に関わって欲しいと言われたのがきっかけ。ここまでのめり込んだのは、私は都会で働いていたが、ビルに心が疲れた状態だったことと、小さい頃からアートや音楽など大好きなことをする時に最初に思い浮かべるのが森だったこと。育った場所も森に近く、父がキャンプに連れて行ってくれていたことなど、森は心のふるさとだった。また、最近のシカの増加について、森の現状を心配していたこともあった。今はかなり楽しんで活動している。そのような経緯で、都会の人たちのライトな森との関わりや場づくりを中心に考え、様々なイベントを企画している。

○野口 結子：

神戸学生森林整備隊“こだま”の野口です。神戸大学農学研究科の博士後期課程1年で、里山の研究ではなく巨樹の研究をしている。サークルとは全く関係ない研究をしているが、神戸大学の森林資源学研究室に3回生の時に入り、その時に先輩が始めたこの森林整備隊に関わるようになった。岐阜県山県市という田んぼがたくさんあるところで育ち、10歳の時に京都に移り住み、そこから生き物と離れた生活をしていた。大学生で神戸に来て、3回生になって「キーナの森」という所に開園前から関わり、生き物の面白さ、里山を使った生活の話、草木染めのこと、人の文化など、そういったものを絡めて実体験させてくれた人々がいたので、そこから夢中になり今の活動を続けている。

○内海 美沙：

実家が土木建築業を営んでいる話をしたが、私には3歳離れた弟がおり、弟は中度の障害を持っている。見た目は普通であるがコミュニケーションが少し苦手、仲は良いが将来ずっと守ってはいけないと思い、自分の人生を犠牲にせず弟を幸せにするにはどうすればいいかと考えたとき、世の中全体が良くなったら、私が守らなくても幸せに生きていけるのではないかと考えた。そのような考えの中、実家が土木関係だったということもあり、「持続可能な社会づくり」「コミュニティが活躍できる世の中」という2大テーマが私の中にある。また、「人と自然の共生まちづくり」というものにも興味がある。小学校の時に「平成狸合戦ぽんぽこ」というジブリ映画を見て、大人達は何をしているのかと思った。しかし、壊したのが大人で政治で土木なのであれば、戻せるのも大人で政治で土木だと思った。そこで、大学は実家を継ぐ可能性もあり、土木学科に進学し河川工学を勉強した。多自然型川づくりの方向で就職したかったが、多自然型川づくりのブームが一段落しており、また数十年後のブームに備えていた頃、たまたまテレビで見た林業がおもしろそうだと思う、林業の門戸を叩いた。

○塚本 竜也：

実家は広島で育ち、サッカーばかりやっていた。高校生の時にサンフレッチェ広島のユース試験を受けに行ったが不合格で、人生初の大きな挫折をした。これからどうしようかと思った時に、図書館で砂漠化がテーマの写真集を見た。サッカーと同じくらい好きだった動物が干からびて死んでいく写真を見て、これはまずいと思った。それで勉強して大学で森林を専攻した。少し勉強すると、



世界の問題と日本の森は密接に関わりを持っており、海外のことも大事であるが、裏山の森をなんとかすることから始めなければと思い始めた。その中で、市民にできることの最大化を図ること、ボランティアの力をどこまで活かせるのかに興味を持ち、アメリカに行き、その後NPOでずっと働いている。NPO法が出来て20年になり、その頃からNPOで働きその変遷を見ているが、期待できる部分もガッカリする部分もあると思いながら働いている。

○作野 広和：

私自身の話をすると、小さい頃から両親の実家が山間部にあり、その繋がりから山間部の暮らしや営みが自然と身についた。ちょうど私くらいの年代が狭間で、例えば隣の家には電話がなかった、生まれた時は五右衛門風呂、トイレは汲み取り式などを経験した最後くらいの世代である。SLが走っていたのもかろうじて覚えている。いま過疎地域の研究をしているが、自分が過疎の狭間に生まれ育ったという経緯がある。「土の人」に対しては非常にリスペクトしており、当初はそういった人々のお手伝いをすべきかと思っていたが、自分の置かれた立場を極めることでリスペクトしている皆さんへの恩返しをしたいと考え、自分の立場の仕事を一生懸命やっている。

パネルディスカッションは短い時間なので、ズバリ直球で次の質問をさせていただく。タイトルにあるように、多様な主体がどのように里山に関わり、或いは、里山保全活動や人材づくりにどのように参画いただくべきか、そのアイデアや課題について改めて語っていただきたい。

○塚本 竜也：

多様な主体の参画は非常に大事。私たちの活動も里山がメインであるが、大事なことは手をつなごうと思う相手のことを知ること。私たちは森づくりの団体であるが、様々な分野の団体と連携している。子どもの貧困の現状や引きこもりの若者の心理状況など、森の中だけでは知り得えなかったところと手をつなごうとすると、知らない状態では手の結び所が見当たらない。引きこもっている若者たちの活動に10年ほど取り組んでいるが、様々な人、様々なケースがある。相手先の事業者にも森の作業の声掛けをしても、今の若者は喋ることができない、事務ワークなどもできないなどと言われる。こちらからは、喋れなくてもいい、作業はいくらでも細分化が可能で、その人に合った活動を作ることができることを話して進めてきた。若者たちとの関わり方を支援されている方々と一緒に活動し、教わりながら身につけていった。次第に相手が求めていること、里山でできることなど具体的な提案が変わっていく。単に里山に来てくださいという声掛けより、相手のニーズを調べ、そこに対して里山でできることを提案する提案力が大事。また、イベントか継続的な関わりかどうかという点。イベントに参加いただくのは簡単だが、継続的に関わりを深めながら理解し、できることを高めていく道のりが大事である。そして団体としては、団体の内部に関わりのステップを築いておくことが大事。私たちの団体でも、一番の上級者はチェーンソーや機械を使うが、最初は基本的に手作業。ただ、手作業ばかりやっているともっと上手くやりたいとなり、活動参加数に応じて研修内容を設けたり、作業技術だけでなく小グループのリーダーシップを身につけてもらったりしている。それらはボランティア活動においてどちらも大事な要素である。技術を身につけてもらうことに力を入れているボランティア団体が多いかもしれないが、それは大事である一方で、チーム活動の際に、その人がいることでチームが安全かつ効果的に機能し、参加者に楽しかったと言って帰ってもらえる活動ができるということも大事である。そのようなことを関わりが深まる中で徐々に任せている。そういった若者が増えると、新しい人や団体を連れてくるなど新しいつながりが生まれることがある。つまり、来てくれた若者が高めたいと思っている能力を活動の中でサポートし、その高まった能力を実際に使える機会を作っていくことが大事だと思い活動している。

○作野 広和：

早速重要なお提案として、発信する側の提案力が問われるということ、相手が何を望んでいるのかを洞察する力、そういったものが要だという非常に奥深い言葉をいただいた。次に内海さんから。

○内海 美沙：

私の講演のテーマで「ニーズを引き出しコラボで解決」としたが、その時に必要だと思うのが、多様な言語を扱えること。ここでいう多言語とは、日本語や英語やドイツ語などではなく、田舎では方言とは違った共通言語がある。私は都会から田舎に入り、言語が全く違うと感じた。まず森林組合に入った時、電話に出た際に丁寧に受け答えしていたところ、ベテランの事務の方に怒られた。森林組合は地域の森林組合なので硬い言葉遣いでは

はなく、親しみやすいように答えてくださいと言われた。山主さんの所に行くときも、懐に入るような感じで入っていく。そのため、家庭状況なども知った状況で森林プランナー・森林管理というものをしていかなければいけない。そのような中で多様な言語・共通言語を見出さないといけない。



土木から林業に来て、その専門家としての言語も全く違う。同じ内容でも表現が違う。その時々のカメレオンのように対応しなければいけない。同じ山主さんでも、サラリーマンをしている息子さんに馴れ馴れしくすると嫌がられることもある。森林プランナーや協力隊やＩターンで来られた方には、そのようなことができない人が多く、皆さんは共通言語を持っておらず苦労されている。私は技術的な面だけでなく、できればそのような方に共通言語を指導していくという人材育成の役割をする方が、より貢献できるのではないかと考えている。

○作野 広和：

多様な言語やその地域での共通言語をどう養うのか、カメレオン化していく必要があるということ。それでは次に野口さんから。

○野口 結子：

私の活動は、最初は先輩について行くのが初めてだった。「キーナの森」にその名前もついていないころ、階段がなく子どもが歩くのに危ないので階段を作ろうとしたことや、先輩から聞いた里山の授業で見たことを間近で見られる場所として興味を持っていた。本当に教科書通りのナラ枯れや倒木、人の手が入っておらず歩きづらいこと、それらを整備することから始まり、そういった活動自体が楽しく続けられた。

全国的に言われている里山での若者離れや、知恵が引き継がれず荒廃地になることなど、自分なりに解決方法を下っ端の時から探していた。ヒサカキやソヨゴなど森を暗くすると悪者扱いされている木があり、それを切るように言われ、言われるまま全部切ってしまったことがあった。その際、ベテランの方から全部切ったときの影響を尋ねられ、私は森が明るくなると答えた。しかし、ヒサカキやソヨゴと虫たち鳥たちの関わりのお話を聞き、何も知らずに全部切ってしまうようなことをすると、若者が里山に継続的に入ってきても意味がない、自分たちで考えながら里山を整備していかないと意味がないと学び、受け身だった自分を反省した。そういった体験をさせてくれる大先輩たちがいる所に、私たちが学びに行くという姿勢が大事。そういった気持ちを持ち続け、後輩に伝えていくことが私たちの課題だと思っている。

○作野 広和：

関わっていく側が主体的に学んでいく必要があるということ。知恵などが失われている現状に対し、何とかしなければという使命感は持ちながらも、それは抗えないようなものだと思っていたが、今の話からは必ずしもそうではなく、志を持って関わる人が意識をして学んでいくと継承できるものかもしれないと感じた。それでは吉井さんお願いします。

○吉井 麻里子：

以前は都会で勤め、おしゃれなことも都会で遊ぶことも好きであるが、自然が好きで関わることを諦められなかった経緯がある。元々の自然好きの人達だけでなく、心の中のどこかで自然が好きだと思っている人たちへのアプローチを普段から考えている。先ほど多様な言語という話があった。私はイラストを描くことが得意で、今度開催するイベントのパンフレットにイラストを入れた。森



の中の生物の関係性を宇宙のように見立ててデザインしたが、それを言葉で書こうとすると浅い言葉しか浮かばなかった。見た人も自分の得意な言葉がある。例えば、芸術的な言葉に惹かれる人もいれば理論的な言葉に惹かれる人もいる。知覚的なものは割と広く伝えられるのではないかと思い、そのような形にした。その結果、様々な方からシンポジウムへの参加表明があり、様々な形で伝わったと思っている。

また、「ブナ守の会」から離れるが、お寺で毎年夏に「能勢妙見山山の日フェスタ」を開催しており、今年は「エシカル」というキーワードをテーマにした。「倫理的な」という幅広い意味の言葉で、そのテーマについて話をしていた時、地元の能勢や黒川で自然を大事にしながら活動される方々を紹介したいということになった。しかし、お店の出店だけでは伝わらないため、結論として、その方々10名のインタビュー記事をまとめた冊子を当日たくさん配布した。その結果、出店された方も喜ばれ、冊子を見た方とのコミュニケーションを取れたと言われた。そういった「山に関わる人たち」と「森に興味がある人たち」の間にある情報にはまだ溝があると思うので、今後どう伝えるのか、どのようなキーワードに興味があるのかなどを観察し、話を聞いていかないと結びつかないのではないかと考えている。

○作野 広和：

伝える力や伝える対象を理解することが重要というご発言だった。4人からは、関わる側や発信する側それぞれに主体的な対応が必要だということが共通した。

すこし具体的な方策をお聞きしたい。先ほど塚本さんが提案力ということをおっしゃったが、どうすれば提案力が身についたり対象者を知り得るようになるのか、何か持続的な学びのようなものが大事なのか、アイデアや日頃から取り組んでいることを教えていただきたい。



○塚本 竜也：

例えばNPOに所属している人であれば、里山の団体のネットワークを飛び出し、中間支援団体が行っているような他の分野のNPOが集まる会議に行くなど、新しい出会いを作ることは大事。その中で出てくるキーワードが森ではどんなプログラムにできるのかなど、変換していく作業が提案に変わっていく。直接お話を聞くと、例えば若者支援に関わる人たちが、地域の中にどのような場を作ろうとしているのかが分かり、それでは森ではこうやってみようという感覚を感じるようになればと思っている。忙しいのでそんな時間はないと言われるかもしれないが、半年に1回くらい意を決して知らない場所に飛び込んでいくようなことをしていく必要があると思う。

○作野 広和：

世の中で課題になっていることを知り得て、それを自分の分野に引きつけて変換していくというご意見だった。続いて内海さんには、里山カメレオンになるはどうしたらいいか、仮に意図して踏み出そうとしたらどうすればいいと考えられるか、あるいは意図するものではないのか、などのお考えをお聞かせいただきたい。

○内海 美沙：

私は客観的に物事を見るのが得意だとよく言われるが、それは私自身が生き立ちで苦しんだから。私自身も ADHD の傾向があり、人とは価値観が全く違った。そのため、共通言語を頭で理解せざるを得ない。相手が何を考えているのか、なぜそう言ったのかを頭や理論や比較検討を通じ、多くの情報を照らし合わせて理解しなければいけないということを幼少期からずっとやってきたので、ある意味訓練されている。それは意図的にも出来ると思う。例えば、英語教育のような言語教育と同じような形で可能ではないか。他の人からは技術者の通訳者・翻訳者という役割を担うべきと言われることがある。自分でもそれを自覚して突き詰めていく中、最初は技術者に対してのみ多様な言語を身につける必要があると思っていた。しかし、それ以外にも自分の中でまだ言語化できない違和感があり、まだ言語を見出せてないものに対しては、実際に様々な体験をしたり、他の人から話を聞かせてもらう中で、様々なことを学ばせてもらっている。

ただ、それは私のタイプにあった言語習得の方法であり、多くの方には、事例を挙げてお伝えしていけばスムーズに上手く伝えられるのではないかなと思う。

○作野 広和：

多様な経験をすることにより多様な言語を習得する、ある種トレーニングをされているという受け止め方をさせていただいた。野口さんには、学生が里山や活動地に参画するには、何かきっかけや良い方法があるのかについて、どのようにお考えかお聞かせいただきたい。

○野口 結子：

私のきっかけは、研究室に入ったことと幼少期から自然が好きだった事であるが、一度挫折している。4～5年続いていた活動を先輩から引き継ぎ、毎月当たり前のようにレンタカーを借りて時間を作って森に行くという流れがあった。いざ開園して様々な人が活動に入り、その隣で活動していると、活動することがマンネリ化したり、整備の仕方などを上から言われ、単なるお手伝いのようになった。悪いことではないが、学生だからと時間があるように見られた。それでも自分にはプライベートの時間もあり、自分自身を労働力のように思ってしまったことがあった。活動する人が少なくなった時期があり、人を増やす方法を考え始めた時に代表になった。その際、それまで私が



活動が続けられた理由に、自然を教えてくれる人達や、そこに行けば自然があったということが大きく、その年の新入生歓迎の時から、自然観察や自然の教育を実施していることを全面的に打ち出したところ、今の後輩たちが現れてくれた。森に多様性があるように、集まる学生たちにもそれぞれ好きなものがあり多様性がある。それぞれの強みを活かして里山に関わっていくというスタイルを取った方が、人は集まるのではないかなと思う。

○作野 広和：

まさに、多様性に取り組むことをオープンにすることで様々な人が集まったという貴重な事例だと思う。

吉井さんには、情報発信や伝達力など、技術論でなく考え方としての伝える力を醸成するにはどのようにすればよいかをお尋ねしたい。

○吉井 麻里子：

ワクワクすることや新しいことに自分自身が目を向けないと、そのような力は湧かないと普段から考えている。私は夢中になると集中してしまうタイプで、いまなぜワクワクしているのか、まず自分の中で内省してみる。これまでもシンポジウムなどを開催するとき、私の中でマンネリ化があった。では何を組み合わせればワクワクするような新しいものになるのか考えたところ、自分がワクワクしたものは自分の根本のところで繋がるがあると思っている。やはりワクワクを見逃さず、自分の中で内省をして考えて、どのように伝えていくかを私は考えている。

○作野 広和：

自分自身がワクワクするところを原点とするというお話だった。

最後の質問になるが、言い残された事や会場にいらっしゃる方へのメッセージなど、思いの丈をお話しいただきたい。



○吉井 麻里子：

若い人が新しい場所で活躍する時、自分の力を試すことや自分の可能性を考えて参加しているのではないと思う。その人たちに自分が活躍できていないと思わせてはいけないと考えている。先生が子供たちに教えるという図式も大事だが、例えば珍しい虫を見つけた時に、子供たちにも尋ねてみて一緒に考える。そういった主体性を引き出したり、来てくれている大学生にやりたいイベントを尋ねたり、トークイベントを任せるなどの無茶振りをする。それを楽しんでついてきてくれることがすごく良いと感じている。また、もともと高齢の方だけの団体であったのが、水辺で遊んでいた若い男性に声をかけてその人をリーダーにした事例も知っているが、何か若い人たちが自身が活躍していると思えるような土壌ができていけばと思う。

○野口 結子：

私の経験からも、大人の人たちにとっては無茶振りと思っているかもしれないが、私たちは任されるとやる気になるところがある。これをやってあれをやってと言われると仕事になるが、基礎は教えていただくが、見守っていただける環境があれば、学生は良くも悪くも時間は自由に使えるので、頑張れるし、教え合いながら成長していけるとことがある。みんなと楽しくやっていくには、教えていただきつつも少し任されている、そんな充実感がある環境があればと思う。それから、私たちの団体はまだ「キーナの森」でしか整備をしたことがなく、北摂地域で様々な山を見てみたいと思っているので、イベントなどがあれば呼んでいただけるとありがたい。

○内海 美沙：

本日この会場にいる方は大ベテランの方々と、技術も見識も経験もお持ちの方だと思う。私もそうであるが、若者と言うと浮き足立った人間が多い。それはそれでいいと思うが、楽しみを持ちながらも、楽しいだけではダメ。いま田舎の地域では、「お節介おばちゃん」と「カミナリ親父」がいなくなったから地域が駄目になったと言う方もいる。ただ、今の若者は脆弱で、昔のカミナリ親父をやるとすぐにいなくなってしまうので、その匙加減が難しい。ほとんどアメで少しムチの割合でないとダメかもしれない。甘い若者だが少し叱ってだいぶ甘やかす。叱ることは皆さんにしていた

だきたいし、技術的なこと、ここは食いしばらなければいけないことなどは教えていただきたい。どんな時にもどん底に落ちきらないようにするには、社会や人が大事になる。そういったところは今後ともいろいろご指導いただきたい。

○塚本 竜也：

二つあって、一つは私たちが里山で向き合っていることは、この社会の未来だと思っている。多様性や持続性や包摂性は里山の大事なキーワードであり、私たちの活動は地味であるが、これらを大事にすることは未来に向けた大事なメッセージだと思っている。これを私たちの地域だけでなく、全体への大きなメッセージに変えていくことが大事であり、それが里山を守る力になる。もう一つは、私たちが弱いのはエビデンスを示すこと。例えば子どもの自然体験の大切さは直感的に大事だと感じるが、本当にそうなのか突っ込まれた時に答えられない。いろいろなところからデータを集めているが、やはり根拠は大事になる。市民活動では面倒で忘れがちになるが、そのような事例やエピソードは集められる。それを大量に発信して、みんなの力でやっていくことが大事。そうやって森を守る活動はこの社会を維持し、次の時代を担う若者たちの成長にも役立つことに繋がる。私も栃木で微力であるがコツコツと取り組んでいくので、また皆さんとそういったお話やそれぞれの事例を持ち寄ってお話したい。

○作野 広和：

限られた時間の中で、多くの良いキーワードが出たと思う。

二点整理させていただく。一つは参画する側の主体的な対応が必要だということ。学びや経験など、ただ待つのではなく準備トレーニングが必要だということ。もう一つは参画された側も参加者の主体性を担保すること。例えば学生に任せることに不安もあるが、それにより力が発揮されることがあることも重要。それらの相互作用の中で、里山に関わる人が増えていくのではないか。またその根底には多様性があり、参画する側と参画される側との多様性×多様性のような形で、里山の持続可能性が担保されるのではないかと感じた。



北摂里山フォーラムの様子



実践活動報告③



実践活動報告④



満員の会場



パネルディスカッション



発言するパネリスト



会場の様子



閉会后①



閉会后②



編集・発行
兵庫県阪神北県民局 県民交流室 環境課

住所
兵庫県宝塚市旭町2丁目4番15号

ホームページ
https://web.pref.hyogo.lg.jp/area/n_hanshin/index.html (兵庫県阪神北県民局)
<http://hitosato.jp/> (北摂里山博物館)